

Title	「政治算術」の世界
Author(s)	川北, 稔
Citation	パブリック・ヒストリー. 2004, 1, p. 1-18
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/66410">https://doi.org/10.18910/66410</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 「政治算術」の世界

川北 稔

## 1 はじめに

「18世紀は政治算術の世紀であった」とは、今は亡き産業革命史研究の泰斗 T.S. アシュトンがその名著の冒頭においた言葉である。しかし、「政治算術」、別名「政治的解剖」という学問分野が生まれたのは、明らかに17世紀のことであった。「政治算術」という言葉は、ウィリアム・ペティの名とともに広く知られているものの、その歴史的な位置づけは十分になされてきたとは言えない。実際のところ、17世紀の「初期重商主義思想」の研究があれほど盛んであった「戦後史学」の時代においてさえ、大原社会問題研究所で翻訳編纂された大内兵衛や久留間鮎造による研究と松川七郎によるペティの伝記的研究<sup>(1)</sup>をのぞいて、「政治算術」のまとまった研究はなかった。

しかも、わずかに見られる研究も、そのほとんどは、小林昇の古典的研究のように、たいていはのちに成立する経済学の先駆として、「経済学史」の上に位置づけるものばかりである。それが、いわゆる「ペティの法則」のもとになったとか、労働価値説の起源であるということは、そうした研究のひとつの常識となっている。

しかし、このような見方は、一種の「後知恵」であって、政治算術家たちは、スミスやリカードの「先駆」であることにのみ名誉を感じるとは思えない。彼らは、近世という彼らの時代に生きていたのであり、近世イギリスに特有の「知」あり方を体現していたのである。結果的には、経済学にもつながったかもしれないが、本来そのようなことを目的としたものではない。

欧米でも、状況はあまり変わらない。19世紀の C.H. ハルによる周知のペティの著作の編纂・刊行を別にすれば、フィリス・ディーンら応用経済学派や歴史人口学の研究においてデータとして便利に使われたぐらいで、17世紀に成立し、19世紀には消滅してしまったこのユニークな学問分野を、中世と近代の中間に位置した「近世社会」に特有のひとつの思想体系として分析した例は、ほとんどない。

---

(1) 松川七郎『ウィリアム・ペティ：その政治算術＝解剖の生成に関する一研究』上・下巻、岩波書店、1958-1964年。

本稿は、事実上、ジョン・グラント (John Graunt) にはじまり、ペティ (William Petty) をへて 18 世紀に花開いた「政治算術」を、近世西欧社会、言い換えれば、近代世界システムの成立期における、固有の知のあり方として位置づけることを課題とする<sup>(2)</sup>。

## 2 「政治算術」とは何か

「政治算術」は、中世的・神学的な思考法から近代的な学問体系への移行期に当たった「近世」に固有の「知」のあり方として、博物学に似た意味合いをもっていた。近代になると生物学その他の多様な「学」に分解されてしまった博物学と同じで、「政治算術」は「近世人」に固有の精神構造を表象するものである。とはいえ、博物学がたんに近代生物学の先駆としてのみ見られるべきでないのと同様に、「政治算術」もまた、経済学、統計学、社会学、公衆衛生学など近代の社会諸科学の起源でもあったというよりは、成立期の近代世界システムに特有の「知」のありかたであったと考えるべきである。

そのような角度からみると、従来、「政治算術」について最も「歴史的」といえる評価をしているのは、意外なことに、経済学史ではなく、統計学史の分野においてである。とくに 18 世紀末に活躍したスコットランドの統計学者で財政学者であったサー・ジョン・シンクレアの評価などにそれが認められる。

「はじめ、私が statistics と statistical という二つの言葉を使いわけたことについて、多くの人々が驚いたようである。イギリスではこの二つの言葉は同じ意味で使われていたからだが、他方、ドイツでは、statistics というのは、一つの国家の政治的国力を測定するための研究、つまり国家にかかわる問題の研究という意味で使われてきた」。ここでシンクレアのいう statistics すなわち、「統計学」こそは、「政治算術」そのものである。反対にいえば、統計学とは、もともとそのような近世に成立したばかりの主権国家の国力を計る学問でもあったわけだ<sup>(3)</sup>。

では、どのような方法をもって、国力を測定するのか。「政治算術」という名称の創始者として知られるペティは、全体が 10 章の箇条書きのその著『政治算術』において、自らの学の手法を次のように説明している。

---

(2) 比較的近年のペティ評価もこの点では何ら新味がない。稲村勲「重商主義時代における経済学の胎動」竹本洋編『重商主義再考』日本経済評論社、2002年、95-123頁、A. ロンカリア、津波古充文訳『ウィリアム・ペティの経済理論』昭和堂、1998年、馬渡尚憲「W・ペティの経済学」(上・下)『研究年報経済学』(東北大学経済学会)、36巻4号、1975年、464-477頁、37巻1号、1976年、43-68頁。Ph. Deane and W.A. Cole, *British Economic Growth 1688-1962*, Cambridge U.P., 1962; Ph. Deane, 'The Implications of Early National Income Estimates for the Measurement of Long-Term Economic Growth in the United Kingdom', *Economic Development & Cultural Change*, Vol.4, 1955, pp. 3-38; P. Mathias, 'The Social Structure of the Eighteenth Century: A Calculation by Joseph Massie', *Economic History Review*, 2nd ser., 10-1, 1957, pp. 30-45.

(3) このあたりの評価については、K. Pearson, *The History of Statistics in the 17th & 18th Centuries against the Changing Background of Intellectual, Scientific and Religious Thought*, ed. by E.S. Pearson, Charles Griffin & Co. Ltd, 1978, p.8 et passim.

政治算術、つまり、「ポリティカル・アリスメティック」は、「単に比較級や最上級の言葉を使い、また理知的な説明をする代わりに、私の言おうとするところを数量 number と重量 weight と尺度 measure とによって表現する」のであって、「特定の人びとの変化常なき心や意見や嗜好や感情はこれを省みない」つもりである。「以下、私の議論の基礎となるべき数量と重量と尺度とによって表される観察または命題は、いずれも真実であって、そうでなくとも明らかに偽りとはいえないものである」（大原社会問題研究所編・大内兵衛訳、復刻版、栗田書店、昭和 44 年、64-65 頁、松川七郎訳、岩波文庫版、昭和 30 年、24 頁）。

つまり、「政治算術」とは、国家社会のあり方を、「数量と重量と尺度とによって」可能な限り徹底的に数量化して示そうとする試みである。もっとも、同時代に入手可能な統計資料は限られていたから、今日からみれば、まったく客観的根拠を欠いた数値も出てくるし、そこに露骨に見えるある種のイデオロギー性を指摘することもたやすいが、その基本精神は「国家」すなわち「政治体」のありようをあくまで客観的に数値で示すことにあった。ただし、イギリスでこのような推理統計的手法を開発したのは、明らかにペティではなく、グラントであった。A.A. ラスノックの次のような評価は、たしかに正鵠を射ている一面がある。「新しい数量的な人口推計技術を編み出したのがグラントだとすれば、それらの技術に「政治算術」というキャッチ・コピーを与えて輝かせたのは、かの華々しいヴァチュオーソ [あらゆる分野の学問に関心を示した、アマチュア的・ジェントルマン的・ルネサンス的な科学者]、ウィリアム・ペティであった。その膨大な著作活動をつうじて、「政治算術」の宣伝には大いに力のあったペティであるが、グラントの慎重な計算に彼が加えたことがらはほとんどない。ペティにとっては、数字の緻密な分析よりは、経済理論への関心のほうが優越していたが、理論の数量化に強い情熱を感じていた彼は、グラントの『死亡表の観察』にぴったりの実例を見いだしたのである」<sup>(4)</sup>。

ラスノックのこの評価の前半は確かに正しい。しかし、後半の評言には、同意できない。本稿の行論中に明らかになるように、私見によれば、政治算術家の主要な関心は、現実の英・仏・蘭三国の国力比較にあり、そこから現実的な政策提案をすることにあつた。ペティといえども、のちの経済学史研究者が思いこんでいるような、経済学の理論化を主なターゲットとしていたわけではないからである。

しかしなお、人口の推計を中心としたグラントやペティの著作は、ほぼ死亡表の数値だけに頼っており、「推計」の度合いのきわめて高いものでしかなかったことは確かである。死亡表というのは、パストの流行をいち早く察知することを目的として、毎週、ロンドンの市街化地域にある教区の死亡数と死因を集計したもので、いささか本末転倒ではあるが、この統計がと

---

(4) A.A. Rusnock, *Vital Accounts: Quantifying Health and Population in Eighteenth-Century England and France*, Cambridge U.P., 2002, p.35.

られた範囲をもって「ロンドン」の地理的範囲とする歴史家も多い。調査は、ペストのはやった1592年に始められ、中断があって、1603年に再開された。この二つの年は、いうまでもなく、強烈なペスト流行の年でもあった。

グラントの『観察』は、この死亡表の死亡数、とくに女性のそれを基礎として、ロンドンの人口を推計したものである。女性の死亡数から、女性の人数を推計し、さらに、出産可能年齢の女性数、男性の人数、兵役可能年齢の男性数などをつぎつぎと推計する方法である。したがって、グラントとペティの推計は、数値そのものとしては、今日からみればきわめて危ういものであることはあらためて指摘するまでもない。

今日からみて統計的に最も客観的事実に近い数値を打ち出し、当時の社会構造を最もよく示した政治算術家と目されるのは、いうまでもなく、17世紀末のグレゴリ・キングである。彼は、人口推計を行うにあたって、故郷の土地で実地調査を行い、炉端税などの租税台帳の数値と実際の違いを計数化するという手続きを踏んだ。今日でも十分に通用するサンプル調査的な手法である。以下の論考で主として、キングに言及する理由の一端はこの点にある<sup>(5)</sup>。

#### 近代的な表現方法としての数表

ともあれ、近代の「知」の特徴である算術的思考法をもたらした「政治算術」は、当時の社会について、何らかの意味での調査記録をもとに、可能な限り客観的な数値をつくり上げようとした。と同時にそれはまた、考察の結果の表現方法にも画期的なイノベーションをもたらした。「数表」の利用である。たとえば、数字を並べて縦ないし横の「合計」をとるようなかたちの数表をもちいて、相手を説得する表現方法は、今日われわれの血肉となっているが、歴史的にはそれほど古いことではない。一般的な議論のための表現方法としては、数表もまた、近世の「政治算術」、より直接的にはグラントが生み出したもののように思われる。

「表現方法」としての「表」の重要性を徹底的に指摘したのは、フランシス・ベイコンである。彼の主著『ノーヴム・オルガヌム』（岩波文庫版、桂寿一訳、昭和53年、および春秋社版「世界大思想全集」第7巻、岡島亀次郎訳、昭和2年）は、全編これ「表」で埋められている。しかし、そこにあるのは、ここでいう数表ではまったくくない。彼が実践したのは、たんにものごとを「箇条書き」にして、整理するというだけでしかない。同様に、たとえば、16世紀前半

---

(5) 手稿を含むキングの著作については、主に P. Laslett, *The Earliest Classics*, Gregg International Publishers, 1973 所収のものを用いる。グラントの著作 (*Natural and Political Observations Mentioned in a following Index, and made upon the Bills of Mortality By John Graunt, Citizen of London, With reference to the Government, Religion, Trade, Growth, Air, Disease, and the several Changes of the said City*, London, 1662) については、同じくラスレットの資料集に採録されているもののほか、ペティ著作集の Hull 版 (C.H. Hull, *The Economic Writing of Sir William Petty*, Cambridge U.P., 1899) を用いる。翻訳は、久留間鮫造訳『死亡表に関する自然のおよび政治的諸観察』（大原社研の統計学古典選集）、第一出版、昭和43年を用いる。ペティの『政治算術』については、岩波文庫版のほか、やはり大内兵衛訳（大原社研の統計学古典選集）、第一出版、昭和43年も参照した。ただし、後者は、同時代の歴史の実態についての知識不足のせいか、誤訳が目立ちすぎる。

の関税表をみると、商品とその単位当たりの関税額が一覧できるように並べてあるが、それも、合計を出したり、そこから何かを算術的に推論していくようなものではない。<sup>(6)</sup> ベイコンの「箇条書き」という意味での「表」は、古代ローマの十二表法の例を挙げるまでもなく、ほとんどおそらくあらゆる社会、あらゆる時代に存在した。

しかし、ジョン・グラントの『死亡表の観察』やペティの『政治算術』になると様相は決定的に変わる。この点でも決定的な転換は、ペティよりはグラントによってなされたというべきであろうが、ともあれ、彼らの著作では、われわれが「表やグラフ」という場合の数表が議論の中心にあり、ふんだんに登場する。時系列にそった「数表」は、そこに見られるトレンドを、さらに先までのぼしてみることで、将来の推移をも推測させる。グラントがこの手法の創始者であったかどうかは確定できないが、広く読まれた冊子において、初めてこのような手法を用いたのが彼であることは、疑いを入れない。「政治算術」はこの意味でも、科学革命の時代の産物であったといえよう。

数表の頻用の背景には、当然のことながら、算用数字の普及があったと思われる。複雑なローマ数字の世界では、数表の威力はあまり発揮されない。算用数字自体は、古くから使われることがあったとしても、それが「表」のなかに入り込んでくることに大きな意味があったといえよう。<sup>(7)</sup>

政治算術家たちは、さすがにグラフまでは描かなかったが、時系列統計をつくった以上、それを延長して歴史的な未来推計を行うことは容易であった。こうして、ロンドンの未来、イギリスの未来はもとより、英・仏・蘭三国の未来のシミュレーションなどが可能になったのである。数学的には、17世紀前半にジョン・ネイピアが「対数」の概念をつくりあげていたから、これを活用すれば、シミュレーションはもっと容易であっただろうが、「政治算術」はあくまで、「算術」的に演算されていることは、あとでみる通りである。

### 3 近世国家の国力比較

政治算術家が、数字をふんだんに使って解明し、表現しようとしたもの、それこそは、成立したばかりの主権国家の国力であった。『政治算術』の1690年版にウィリアム・ペティの子息、シェルバーン卿が、国王にむけて書いた献辞には、父親の書いた『政治算術』には、「政府のことはもちろん、それと並んで国王の栄光、また人民の幸福並びに盛大さに至るまでのことが、算術の普通の法則によって、証明されている」とある。

近世ヨーロッパは、ローマ教皇と神聖ローマ皇帝を漠然とした権威とする中世的な秩序が崩

---

(6) *A Tudor Book of Rates*, ed. by T. S. Willan, 1962 (原書は1582年の刊行).

(7) たとえば、C. Burgess (ed.), *The Church Records of St Andrew Hubbard, Eastcheap, c1450-c1570*, London Record Society, 1999.



壊し、より小規模な主権国家が群生して、宗教改革の動きを加速していった時代である。ようやく台頭し始めた主権国家の国力を、いかにも「客観的」とみえる方法で測定することは、時代の要請にきわめて適合的な営為であった。

「政治算術」は、近世国家の成立とともに生まれた学問であり、国力の測定がその最大の目的でもあった。そもそも統計 statistics という言葉自体が、state つまり、主権国家の形成のひとつの系であるということもできる。統計とは、そもそも主権国家の国力を測定するために編み出されたものに他ならなかったからである。近世の統計とは、基本的にそのようなものであり、体制にとって「有用」とされるもの、言い換えれば「生産的」とみなされたもののみが、その対象となっている。この意味で、「生産」の定義と「統計」とは密接にからまっているのである。たとえば、家庭内での主婦の家事労働は、今日に至るまで、公式の生産統計に載ることはありえない。「市場」にかかわらない営為は、本来「統計」の対象ではないし、公式の生産の概念にも含まれないのである。主婦が家庭内で行う子育ては、「生産」ではないが、保育士として保育園につとめて、給料をもらって働くとその行為は「生産」となる。

さらに、公害や環境破壊、開発の裏での低開発化など、「反生産」というべき現象については、今日に至るまで統計にはのせられていない。概念そのものがなかったために、もとより測定の方法もなく、統計の取りようも、その必要性もなかったということである。マンチェスターの工場で綿布がどれだけ生産されたか、カリブ海のプランテーションで砂糖がどれだけ生産されたかの統計はある。しかし、工場の煤煙でランカシアの空気がどれだけ汚れ、石炭資源がどれだけ減少したか、砂糖生産でカリブ海の緑がどれだけ失われ、地味がどれだけ枯渇したかの統計はとられていない。

したがって、『政治算術』は、近世国家の国力を、近世ヨーロッパ人の生産や富の概念を前提として、可能な限り客観的な数字によって示そうとしたものというべきである。

### 「政治算術」の系譜

「政治算術」は、本質的に国力論である。国力論という意味では、「政治算術」の先駆となったのは、ルネサンス人文主義の影響を受け、16世紀に多数出現したトマス・スミス、ウィリアム・ハリソン、トマス・ウィルソンら、「イギリス」論者ないし「コモンウィール（コモンウェルス）」論者たちである。<sup>(8)</sup>

イギリスというひとつの共同体、すなわち、「コモンウェルス」ないし「コモンウィール」——ラテン語の *res publica* を英訳したもの。これに対して *republic* はいわば音読したもので、

---

(8) 簡単には、川北稔「近世イギリスにおけるステイタス基準の展開」前川和也編『ステイタスと職業』ミネルヴァ書房、1997年、35-41頁。T. Smyth, *De Reipblica Anglorum*, 1583; W. Harrison, *The Description of England*, 1587; T. Wilson, *The State of England Anno Dom. 1600*, 1601 (reprinted in *Camden Miscellany*, 3rd ser., Vol. xvi, 1936). また、Mathias, op.cit.; D.V. Glass (ed.), *Numbering the People: The Eighteenth Century Population Controversy and the Development of Census and Vital Statistics in Britain*, D. C. Heath, 1973.

語源は同じ——を生き物になぞらえ、その解剖をこころみたものである。時代は、ウィリアム・ハーヴェイ（William Harvey）が、人体の解剖によって、血液の循環を明らかにした時代である。言い換えれば、「解剖学」の威力がようやく知られるようになってきた時代である。「政治的生き物」としての国家の「解剖」をめざす基本姿勢は、ウィルソンが最もあからさまに説明している。彼らの基本的な姿勢は、そのまま「政治算術」、別名「政治的解剖」の精神でもある。ここでいう、「政治的」とは‘body politic’の politic であるので、要するにイングランド国家のことである。そこでは国王があらゆる指令を出す頭部であり、労働者や農民は手足となる。国内を巡る通貨は血液である。かくて body politic つまり国家は、有機体すなわち生き物であり、その構成員にはそれぞれ独自の役割がある。

さらに、ここであげたウィルソンの『イギリスの状態』は、『状態』ないし『現状』(The Present State) という表題をもつ、近世に群生した出版物ないし記述の形式に属しているともいえる。このような形式は、イギリスはもとより、この時代のヨーロッパ各国においてもみられる。イギリスでは、18世紀にも刊行され続けたチェンバレン父子のものやミージュのものが知られているが、ペティ自身が、フランスとオランダの同種の出版物を引用している<sup>(9)</sup>。

出版の形式ということからすれば、グラントやキングの主著がそうであるように、『観察』(Observations) と題するものもひとつの大きなジャンルとなっているが、これもまた、事実上「政治算術」の一種というべきであろう。

こうしてみると、16世紀後半から18世紀に至る時期のイギリスでは、事実上の「政治算術」に当たる知的営みが大流行となっていたことがわかる。国王至上法の発布以来、ローマの権威を否定しようとして、なお十分には果たせない長期の宗教的混乱の時代である。あるいは、17世紀末に至ってイギリスは、いわゆる財政＝軍事国家の様相をつよめ、フランスとの覇権争いを展開するようになる。イギリスという国家が、フランスやオランダその他の国と比べてどういう位置にあるのかということが、多くの知識人の関心事となったのは当然であった。

ペティにも、三国比較をタイトルに謳った著作がある<sup>(10)</sup>。ここでもペティは、自分の方法を「比較的・表面的な言葉ではなく、……Number, Weight, or Measure で表現する」としている（Hull 版、p.98）。キングの著名な『観察』も同様で、1688年から1695年までの7年間にイギリスとフランスとオランダが、国力的にどう変化したかを分析している。18世紀になると、ジョージ・チャーマースのように、もはや「政治算術」を名のらないままに、むき出しのかたちで、三国の国力比較論を展開する論者さえ現れる。彼の一書の表題は、「政治算術」の最終目的が国力測定とその未来予測にあったことを明確に指し示している。18世紀における戦争と平和、と

---

(9) 川北稔『工業化の歴史的前提』岩波書店、1983年、第9章参照。

(10) *Political Arithmetic, or a Discourse Concerning The Extent and Value of Land, People, Buildings, Husbandry, Manufactures, Commerce, Fishery.....As the same relates to every Country in general, but more particularly to the Territories of his Majesty of Great Britain, and his Neighbors of Holland, Zealand, and France*, 1691 (reprinted by Thommes Press, 1992).



くにフランス革命に起因する戦争が、各国の経済力をどのように変えたのかということが、この著作の課題となっているのである。チャーマースは、国力については二つの考え方がある、という。ひとつは、ある国民の力は、その「数と富に依存する」という立場であり、いまひとつは、「国家指導層の能力、勇気、結束力」だと言われている。しかし、後者は測定のものもないから、前者をもって基準と考える、<sup>(11)</sup>というのである。

当時のイギリスにとって、問題になった国家は、何よりもフランスとオランダであるので、ほとんどの政治算術家は、この二つの外国との比較論をつねに展開している。というより、そのような比較は、「政治算術」の先駆となったジョン・グラントの『死亡表の観察』からしてすでに認められる。

### オランダの優位

それでは、比較の内容はどのようなものであったのか。ここでは、一例として、ペティの三国比較論をみよう。ペティによれば、フランスはオランダ（ホラントとジールント）の80倍の土地を有するが、「今日のオランダは、その富と力においてフランスの80分の1では決してない。それはまさに3分の1ないしそれに近いところ」に達している。

その違いはどこから来るか。「富力と国力の進歩上における右のような差異は、それぞれの場所の位置、産業及び政策、とくに、航海並びに水運の便に由来する」。ただし、この問題について、多くの人びとが「オランダ人は人間以上のものであり、他の国民は人間以下であるかのように（産業及び政策事項にかんして）誇張して……前者を神様、後者を馬鹿、獣、泥酔漢であるかのように」言っているが、「オランダ人の優越の根拠は、もともとその国土の位置にあると思う」（大内訳、75頁、岩波文庫版、42頁）。

要するに、農業ではだめで、商業・金融に従事するのがベストである。とくに、ジェントルマンの次・三男はそうすべきだというのである。

政治算術家がほぼすべてそうであったように、ペティにとっても、国力の源泉は人口であった。しかし、問題は、その人口が、農村に定着せず、都市の職業につくことが大切だったのである。いうまでもなく、この議論は、「ペティの法則」としてあまりにもよく知られているので、あらためて言及するまでもないかもしれない。ただ、ここでも重要なことは、政治算術家としてのペティは、抽象的な一般論を組み立てているのではなく、具体的に17世紀後半のイギリス、フランス、オランダ三国の国力変動のシミュレーションをおこなっているのだということである。のちの時代に、デイヴィッド・リカードが、その「比較生産費説」を、18世紀初頭に締結されたメスエン条約以後のイギリスとポルトガルの現実の関係を前提にして、構成したのと同じである。とくに近世では、抽象的な「理論」がつけられる場合でも、具体的な史実を前提としていることが多いことには、注目すべきである。

---

(11) G. Chalmers, *An Estimate of the Comparative Strength of Great Britain*, 1782, pp.61-62.

こうして、たんなる当て推量の予想や思いこみではなく、「合理的な」計算に基づく現状比較や未来予測を示すことに、「政治算術」の意味がある。ペティがオランダの情報を得たのは、オランダに関する「状態もの」の出版物『オランダの現状』からであり、フランスについても、同様であった<sup>(12)</sup>。

それにしても、オランダの強さはどこから来ているのか。ペティのオランダ観は以下のようなものである。のちに「ペティの法則」として知られる見方は、農業や製造業に比べて、商業・サービス経済を最も進んだものとする考え方である。しかし、それはオランダの実例から抽出されているのであって、「法則」が先にあったのではない。ではなぜオランダは優位に立っているのか。地理的条件が海運に適していることや、平地で風車が使えるといった条件をあげたうえ、いかなる国においても、「農民と船員と兵士と職人と貿易商こそが国の大黒柱 (Pillar of commonwealth) である」という(岩波文庫版、48 頁、Hull 版、p.259)。しかも、とくに船員は、貿易商の役割も兵士の役割も果たすことができ、所得では農民の3倍にあたり、世界中どこでも雇用が得られる。したがって、船員を多数育て、これを擁することが国力の源泉であるとみている。

また、オランダの海運業が、低コスト輸送を実施しえたフライト船——この言葉は使っていないが——の発明によって、圧倒的優位にあることを指摘している(岩波文庫版、51 頁、Hull 版、pp. 260-261)。つまり、オランダはまさに当時、まだ生まれて日の浅い近代世界システムにおいて、いわゆるヘゲモニー国家の位置にあったということである。

ともあれ、都市の住民は、農村的な職業に従事する国民より遙かに裕福であり、オランダの国力の秘密は、都市的な住民が多いことにある。とすれば、ペティにとって、同時代にロンドンが急成長をとげつつあったことは、いわばイギリスの都市化、つまりオランダ化を意味しており、きわめて望ましい現象とみえたはずなのだ。「いまにイギリス全体がロンドンになる」と危惧し、しきりに「人返し」を図ったジェームズ1世をはじめとする支配者や、ロンドンの死亡率が異様に高いことをとらえて、ロンドンを地方から人びとが到来してはそこで亡くなる「人間蟻地獄」とみた18世紀の多くの人口論者が、いずれもロンドンの成長をイギリスにとっての国家的災厄と見なしたのとは大きな相違である。

最後に、何故にオランダは、このような進歩をなし得たのか。その社会的条件については、ペティは次のような議論をしている。

「信教の自由、譲渡証券の登記制度、関税の低さ、銀行制度、庶民金融、弁護士 (Law Merchant) などは、すべて同じ源に発し、その結果もまた同じ海に注ぐものである。すなわち、オランダ人は、百年まえには、貧しくて抑圧された国民であり、寒冷で不快な気候条件のもとで生活していたのであり、とくに、宗教的に異端であるがゆえに、迫害されていた」というこ

---

(12) *The Present State of the United Provinces of the Low Countries Collected by William Albigny*, 2nd edition, London, 1671; N. Besongne, *The Present State of France*, 1669, English edition, 1671.

とである。したがって彼らは、みんなが働かざるをえず、貧しい人も豊かな人も、若いも若きも、「算数、計量、尺度の術」を学ぶ必要があったのである。しかも、「人間というものは、自分のよいと思うことしか信じられないのであり、信じてもないことを信じていると強制的に言わせることは、むなしく、ばかげていて、神の名を汚すものだ」と考えるほかないというのが、オランダ人の立場であった。

「産業は、(一部の人びとが考えるように) 特定の宗教のもとで最もよく栄えるというようなことはなく、いかなる国においても、いかなる政府のもとにおいても、その人びとのうちで異教的な人びと、一般に公認されているところとは異なった信仰を抱く人びとによって、最も活発に担われている<sup>(13)</sup>」。具体的な例として、イスラムが公認されているインドでのヨーロッパ人、トルコのクリスチャンやユダヤ人、イタリアのユダヤ人などがあげられる。

ともあれ、「ペティの法則」は、後代の経済学者を喜ばせるために唱えられたものではなく、農業国フランスより、商業国オランダの方が遙かに先進的なのだとする、ペティの現実判断の表明なのである。イギリスにとって、見習うべきはオランダであり、フランスではない、というのがその立場である。

17世紀の三国比較論は、18世紀のうちに、オランダの衰退が明白になると、英仏二国の比較論に転じる。ナポレオン戦争後に出版されたラウの『農業・工業・財政面での英仏比較』(1823年)はその典型である。ほぼ最後の「政治算術」であるこの書は、すでにセンサスを3度も経験している時期ということもあって、「政治算術」のほんらいの最大の目的であった人口についてはあまり触れておらず、たんなる英仏経済統計比較に近いものになってしまっている<sup>(14)</sup>。

#### 4 世界人口の歴史

国力論としての「政治算術」は、主として現状分析と数年先の見通しを語るもので、歴史的な分析を主要な目的とするものではない。しかし、彼らの未来予測はあくまで、統計的推理、つまり、過去のトレンドを未来に投影する手法によってなされるので、必然的にそれは過去の統計データの分析を前提にしている。しかも、国力の最大の源泉が人口つまりマンパワーにあるというのが、彼らの共通の認識であったから、問題の核心は人口数の歴史の変遷に帰着した。アシュトンがいうように、「政治算術の世紀」であった18世紀が、かの深刻な「人口論争」の世紀となったのも当然である。「人口論争」は、イギリスの人口が減少していて、フランスとの対抗上、危険なのではないかという懸念をもとにした論争であるが、その火種は、ここに取り上げている17世紀の政治算術家たちの議論のなかにある。

---

(13) 岩波文庫版、56-57頁。しかし、岩波文庫版のこの部分の訳は原文のニュアンスを必ずしも正確に伝えていない。Cf. Hull, *op.cit.*, Vol. I, p.263.

(14) J. Lowe, *The Present State of England in Regard to Agriculture, Trade, and Finance with a Comparison of the Prospects of England and France*, 1823.

「政治算術」は主権国家を前提とする、国力測定術ではあるが、当初より、それとの関連で世界の人口に強い関心を示した。ペティもしきりに、アダムとイヴの2人から彼自身の時代までの世界人口の変化を追求している。政治算術家の人口史の手法は、つねに、それが何年で倍増するかを推測することにある。

ペティも同じで、人口倍増に要する期間が10年から1200年になったという。いかにも幅がありすぎるが、「こういう計算をすると、聖書その他の古代の人口に関する立派な史書の正しいことが分かる」のであり、「ノアの大洪水を生き延びた人は8人だとすると、10年ごとに倍増したとして、最初の大洪水後100年で8人から8000人に増えたことになる。大洪水後350年すると——この頃、ノアは没したことになるが——100万人くらいとなる。さらに現在、つまり1682年までには、3億2000万人程度になるのである<sup>(15)</sup>」。

表1、2は、グレゴリ・キングが行った「世界人口」の推計である。表は、ペティやグラントの手法にならって、世界の人口が2倍になる期間が次第に伸びていくという仮定のもとに推計されている。キングの同時代の人口は一応推計できるとして、もうひとつ世界人口が明白な時期である「ノアの大洪水」に際して方舟に乗せてもらえた人間は、ノア一族の8人のみである。したがって、この年の世界人口8がすべての出発点となると、彼は考える。

同様に、アダムとイヴの楽園追放の年の世界人口をアダムとイヴの2人と考えるところからスタートしている表2は、もっと明確に彼の歴史観を示している。

ここにわれわれは、綿密な数学的計算や合理的推計と、聖書の記述をそのまま信用するという、政治算術家たちの非常に奇妙な知的構造をみることになる。「ノアの大洪水」のとき8人に減少した世界人口は、倍々ゲーム——しだいに間延びするのだが——を繰り返しつつ、キングの生きた17世紀後半には6億以上に達したというわけである。むろん、この図式を先に引き延ばせば、「未来の世界人口」も容易に推測できる。

このような「科学的手法」と「聖書」の奇妙な融合は、これもいささか奇妙に聞こえる彼らに特有の歴史感覚につながっている。それを端的に表しているのが、彼らの年代記述法である。表2は、左から順に「ノアの大洪水以後 Anno post Diluvium」、「世界年 Anno Mundi」、「キリスト誕生前（後）Ante Christum (Post X)」という3種類ないし4種類の紀年法を併用している。「ノアの大洪水」は、世界年、すなわち失楽園のときから数えて、1656年目であり、キリスト誕生の2279年前とされている。このうち最も後から発明されたのは、いうまでもなく、「キリスト誕生前」という表現であり、ここではラテン語が使われているものの、今日普通には、俗語である英語（BC）やドイツ語で記されるものである。歴史家が、聖書の記述とは別に、紀元前の歴史を書くようになった時代には、すでに俗語が歴史叙述の用語として一般化していた。ラテン語にたいする「俗語」、すなわち、各国の国語の書き言葉としての定着は、同時にローマ教皇の権威よりは、主権国家の意志が前面に出始めたことをも物語っている。その意味では、

---

(15) Hull, *op.cit.*, Vol. II, pp.465-466, 1899.



*Adhuc of the Number of People in the World.*

*A Computation of the Number of People in the World from the Flood to the present time, and thence for y<sup>e</sup> time to come, with the several Periods of years in which the world has doubled its Number successively since the Flood which was A. Mundi 1656. at which time there were only 8 Persons; And the what Number of years it may probably double its Number successively for y<sup>e</sup> futur<sup>e</sup>.*

As. 2<sup>nd</sup>  
 Eur - 3,000 mil at 5 - 600 mil  
 Asia 2,000 at 6 - 1500  
 Afr 600 at 10 - 600  
 Am. 12,000 at 20 - 1800  
 3900

Number of People from y <sup>e</sup> Flood.	Anno mundi.	Ante-Christum	The several Terms of years in which y <sup>e</sup> world doubled					
008	1656	2279	15 years	1				
016	1671	2264	16	1				
032	1687	2248	17	1				
064	1704	2231	18	1				
128	1722	2213	19	1				
256	1741	2194	20	2				
512	1761	2174	22	2				
001.	024	1783	24	2				
002.	048	1807	21.28	2				
004.	096	1833	21.02	2				
008.	192	1862	20.73	3				
016.	384	1894	20.41	3				
032.	768	1930	20.05	4				
064.	1536	1972	19.63	4				
128.	3072	2023	19.12	5				
256.	6144	2087	18.48	6				
512.	12288	2169	17.66	6				
001.048.	576	2275	16.60	7				
002.097.	152	2411	15.24	7				
004.194.	304	2584	13.51	7				
008.388.	608	2801	11.34	8				
016.777.	216	3069	8.66	8				
033.1554.	432	3396	5.39	9				
067.3108.	864	3790	Annex 145	10				
134.6217.	728	4260	Annex 325	10				
268.12435.	456	4816	881	12				
536.24870.	912	5470	1535	12				
1073.49741.	824	6238	2303	12				
2147.99483.	628	7148	3213	12				
4294.19897.	256	8288	4353	12				
8589.39794.	512	10198	6263	12				
17179.79589.	024	18278	14343	12				
34359.159178.	048	121185	117250	12				
68719.318356.	096	2643245	2639310	12				

*Not: that this Scheme seems not to Encrease fast enough in y<sup>e</sup> Infancy of the World, Upon comparing it with the Holy Scriptures, whereupon I have consulted another Scheme Entred in pag. 10. which increases better.*

*By this Scheme the World should now contain a<sup>o</sup> 1695 about 630 000 000 And the Proportion of its Increase at this time a<sup>o</sup> 1695 is that it Doubles in 68 years. But if it contain but 500 millions of People then it Doubles in about 700 years at this time, And England in about 500 & London in 80 or 90.*

表1 世界人口史 I  
 典拠：表1、表2ともに Laslett, op.cit.



### Aduc of the Number of People in y<sup>e</sup> World

A Computation of the Number of People in y<sup>e</sup> World at y<sup>e</sup> end of every Century of years from the Creation to y<sup>e</sup> Flood, and thence to the Birth of our Saviour and thence to the prime year 1695. and thence to the year of y<sup>e</sup> world 8005. if it was ~~possible~~ to last so long.

A. Mundi	People	A. M.	Post-X. 0	People	Millions	Millions
At y <sup>e</sup> Creation - 000	000.000	3.935	0	84	14	2
100	000.370	4.035	100	98	16	2
200	011.000	4.135	200	114	18	2
300	095.000	4.235	300	132	20	2
400	390.000	4.335	400	152	22	2
500	1.070.000	4.435	500	174	24	2
600	2.250.000	4.535	600	198	26	2
700	4.000.000	4.635	700	224	28	2
800	6.390.000	4.735	800	252	30	2
900	9.500.000	4.835	900	282	33	3
1.000	13.420.000	4.935	1.000	315	36	3
1.100	18.250.000	5.035	1.100	351	39	3
1.200	24.400.000	5.135	1.200	390	42	3
1.300	31.700.000	5.235	1.300	432	45	3
1.400	40.200.000	5.335	1.400	477	49	4
1.500	50.000.000	5.435	1.500	526	53	4
1.600	61.000.000	5.535	1.600	579	57	4
1.700	73.300.000	5.635	1.700	636	61	4
1.800	87.000.000	5.735	1.800	697	66	5
1.900	102.000.000	5.835	1.900	763	71	5
2.000	118.000.000	5.935	2.000	834	76	5
2.100	135.000.000	6.035	2.100	910	81	5
2.200	153.000.000	6.135	2.200	991	87	6
2.300	172.000.000	6.235	2.300	1.078	93	6
2.400	192.000.000	6.335	2.400	1.171	99	6
2.500	213.000.000	6.435	2.500	1.270	105	6
2.600	235.000.000	6.535	2.600	1.375	112	7
2.700	258.000.000	6.635	2.700	1.487	119	7
2.800	282.000.000	6.735	2.800	1.606	126	7
2.900	307.000.000	6.835	2.900	1.732	133	7
3.000	333.000.000	6.935	3.000	1.865	141	8
3.100	360.000.000	7.035	3.100	2.006	149	8
3.200	388.000.000	7.135	3.200	2.155	157	8
3.300	417.000.000	7.235	3.300	2.312	165	8
3.400	447.000.000	7.335	3.400	2.477	174	9
3.500	478.000.000	7.435	3.500	2.651	183	9
3.600	510.000.000	7.535	3.600	2.834	192	9
3.700	543.000.000	7.635	3.700	3.026	201	9
3.800	577.000.000	7.735	3.800	3.227	210	9
3.900	612.000.000	7.835	3.900	3.437	220	10
4.000	648.000.000	7.935	4.000	3.657	230	10
4.100	685.000.000	8.035	4.100	3.887	240	10
4.200	723.000.000					
4.300	762.000.000					
4.400	802.000.000					
4.500	843.000.000					
4.600	885.000.000					
4.700	928.000.000					
4.800	972.000.000					
4.900	1017.000.000					
5.000	1063.000.000					
5.100	1110.000.000					
5.200	1158.000.000					
5.300	1207.000.000					
5.400	1257.000.000					
5.500	1308.000.000					
5.600	1360.000.000					
5.700	1413.000.000					
5.800	1467.000.000					
5.900	1522.000.000					
6.000	1578.000.000					
6.100	1635.000.000					
6.200	1693.000.000					
6.300	1752.000.000					
6.400	1812.000.000					
6.500	1873.000.000					
6.600	1935.000.000					
6.700	1998.000.000					
6.800	2062.000.000					
6.900	2127.000.000					
7.000	2193.000.000					
7.100	2260.000.000					
7.200	2328.000.000					
7.300	2397.000.000					
7.400	2467.000.000					
7.500	2538.000.000					
7.600	2610.000.000					
7.700	2683.000.000					
7.800	2757.000.000					
7.900	2832.000.000					
8.000	2908.000.000					
8.100	2985.000.000					
8.200	3063.000.000					
8.300	3142.000.000					
8.400	3222.000.000					
8.500	3303.000.000					
8.600	3385.000.000					
8.700	3468.000.000					
8.800	3552.000.000					
8.900	3637.000.000					
9.000	3723.000.000					
9.100	3810.000.000					
9.200	3898.000.000					
9.300	3987.000.000					
9.400	4077.000.000					
9.500	4168.000.000					
9.600	4260.000.000					
9.700	4353.000.000					
9.800	4447.000.000					
9.900	4542.000.000					
10.000	4638.000.000					

40 or 50 millions is a better allowance in y<sup>e</sup> Flood.

Anno post Diluuium.

Ante Christu.

The Flood.

By this scheme the World should contain a<sup>n</sup>.x.1695 - 833 millions.

表2 世界人口史II



「紀元前」の概念をもちながら、それをラテン語で表記しているところが、キングの微妙なメンタリティの表象ということもできる。

また、「世界年」や「ノアの大洪水以後」は、ある年を基準として、そこから一方的に歴史が流れていくもので、基準の年以前にはさかのぼりようがない。言い換えれば、それ以前には、歴史は存在しないという歴史観である。これに対して、キリスト誕生を基準として、未来と過去の双方向に引き延ばしていく「キリスト誕生前（後）」は、理論上、過去にも、未来にも、歴史に限界がない。人類の歴史はここに無限の時間を与えられたのである。

しかし、キングの場合、表2では、「キリスト紀元前」は、あえて2279年で停止している。「合理的思考」をめざした「政治算術」の立場からすれば、不徹底というほかないが、あえて自主規制した結果がここにあるのだろう。聖書の世界との、微妙な妥協がここにもある。

### 進歩史観

しかし、じつは、これらの表にあらわれている歴史観の最大の特徴は、「ノアの大洪水」の経験をのぞいて、世界の人口は一方的に増加してきたという見方にある。世界人口は、一方的に成長してきており、今後もそのラインを延長していくことができる、という見方が見事に示されていることである。人類の歴史は、一方的な成長の軌跡であり、今後もその延長上にある。この見方は、要するに、「生産力」の成長に歴史のドライヴィング・フォースを見ようとしたマルクスとも、「持続的成長」に近代社会の特徴をみようとしたロストウとも、相通じるものである。

トマス・スミスやトマス・ウィルソンのような、16世紀の「イギリス論」は、イギリス社会の分析にかんしては、上述のように、「政治算術」の先駆としての意味を持っているが、そこにはこのような「進歩史観」ないし「成長史観」はみられない。むしろ歴史の見方は静態的である。「進歩史観」こそ、グラント以降の政治算術家たちの開発した新しい歴史観であったと思われる。

このような歴史観が、「飽くなき拡大」を基本とする近代世界システムのあり方ときわめて親和性が高いことはくり返すまでもなからう。「政治算術」の時代は、重商主義の賃金論において、いわゆる「低賃金論」から「高賃金論」に転換していく時代であった。じっさい、ペティは、なお民衆の心理状態が前者のようであることを嘆いている。すなわち、「多数の貧民を雇用する織元その他の者が観察したところによれば、穀物が甚だしく豊富なときは、貧民の労働が比例的に高価であって、かれらを雇い入れることはできない（ただ食わんがため、むしろただ飲まんがために労働する者は、ことほどさように放縦である<sup>(16)</sup>）」と。

一般に、労働者というものは、賃金が低いほどやむなく労働を行うので、結果的に多くの労働力が得られる、というこのような「低賃金論」は、民衆が既存の生活水準を維持すること

---

(16) 『政治算術』岩波文庫版、76-77頁、大内兵衛訳、97頁。

を、基本的な行動の指標としている社会に適合的な考えかたであった。そこから、高い賃金こそが労働のインセンティブとなる社会、つまり人びとがつねに、より高い生活を志向するような社会に移行することが、近代化であるというわけである。『政治算術』の上記の箇所には編者のC.H.ハルが付した注釈は、イギリスではまもなくそのような移行が実際に起こったことを示唆している。ハルはいう。「経済理論の普通の仮定からいえば、まさに正反対で、食物が豊富なときには賃金は下がるはずである」と。経済学の普通の仮定が有効なのは、まさしく資本主義の世界システムの内部においてのことであった。「低賃金論」が有効な社会では、そもそも「成長」は期待されてもおらず、余裕があれば「怠惰」つまり「余暇」として消費されてしまう。したがって、「高賃金論」が意味をもつ社会への移行こそが、「持続的成長」の不可欠な前提条件なのである。「政治算術」は、まさにそのような転換の時期に当たっていた。

ところで、イングランド人口についてのキングの主張をみていくと、ここにも独特の進歩史観が見られる。「仮に世界が『ノアの大洪水』後、8人から再出発したとして、イングランドはもともと2人、ないしせいぜい20人を超えない人数からはじまったものとしよう。このイングランド最初の人間の定着は、世界年2200年から2300年頃、つまり「ノアの大洪水」後600年頃、キリスト誕生の1600年ないし1700年前ということになる。当時、世界の人口は100万ないし200万であった<sup>(17)</sup>」。

その後は、ローマ人のイングランド侵入のとき、つまりキリスト紀元前53年、イングランド王国の人口は36万人前後となり、紀元元年頃には、40万人となった。ノルマン征服の行われたキリスト紀元1066年には、200万強、その200年ほどのちの、1260年には、275万人となって、現在（1695年）のほぼ半数に達した。「つまり、イングランドの人口は、今日に至る435年間で倍増したのだ。つぎに、倍増するのは、600年後の紀元2300年のはずである」。このときに、イングランドの人口は1100万に到達しているはずだが、その次に倍増するには、1200年ないし1300年を要し、現在の4倍の2200万に達するはずだ、ともいう。

しかし、ここにいたってキングは注目すべき記述をしている。いわく、「わが王国の面積は3900万エーカーなので、ここまできると人口一人当たり2エーカーとなり、その結果、もはやこれ以上の増加は不可能となるだろう<sup>(18)</sup>」と。

キングの人口論に表れた歴史観には、初めもあるが終わりもある、ということになる。ちなみに、キングは、当時、最も開発された国と見たオランダについては、すでに人口一人当たりの国土は、3と3分の2エーカーという段階にある、としている<sup>(19)</sup>。すなわち、オランダの発展は、限界に近くなっているということが、彼の計算の裏の意味でもある。じっさい、近代世界システムのメトロとしてのオランダの地位はまもなく揺らぎ、イギリスがそれに代位していくこと

---

(17) King, *Natural and Political Observations and Conclusion upon the State and Condition of England*, 1696, p.41.

(18) *Ibid.*, p.42.

(19) *Ibid.*, p.65.

になる。

しかし、このような、「歴史の終わり」という認識は、おぼろげながらペティにもある。ロンドンの人口増加をイングランドのそれと比較した、先に挙げた文書で、このままの推計では、いずれロンドンの人口がイングランド全体のそれを「抜く」計算になってしまうことに気づいたのである。彼はいう。「こうなると、シティの人口増加は、1840年以前のどこかで停止するだろうし、させなければならない。……その直前の1800年でも、いまの8倍にはなる」。この時点で、ロンドンの人口は535万9440人、これとは別に、「農耕、牧畜、その他の農村の仕事に従事すべき人口が446万6000人ほど存在するはずである」。しかし、これでは、ロンドンの人口は、ほとんどイギリス全体の人口に近づいてしまう。だから、表に掲げた「1842年よりは必ず以前に停止するに違いない<sup>(20)</sup>」と。

歴史に「終わり」を設定することは、政治算術家にほぼ共通している。数字のつじつまがあわなくなると、「こんなはずはない」として投げ出すのだということもできるが、そこに、キリスト教の「終末論」の影をみることも可能かもしれない。したがって、政治算術家たちは、同じ経済成長史観、進歩史観といいつつも、のちの20世紀後半に、成長経済学をもちいた歴史観を提示することになるロストウなどが、「成長の限界」をほとんど意識しなかったのとはかなり違っている。マルクス的な社会主義ユートピアの理論とも違う。

## 5 政治算術家の社会観

こうして、世界人口の変遷を計算するにあたって、政治算術家たちは、なお、はじめと終わりをもつ歴史観を抱きながら、その間の絶えざる成長をも前提としていた。キングに典型的に表れるこの歴史観は、上述のように、ロンドンとイングランドの人口変化を論じたペティの著作にも表れている。ペティらの歴史観の特徴は、ロンドンの「人口爆発」にかんする評価にも表れていた。

16世紀に劇的に進行したロンドンへの人口集中は、イギリスの支配者のあいだに恐慌を引き起こしていた。首都への貧民の流入は、何よりも治安の問題であり、疫病の問題であり、飢饉のときの食料などの問題でもあった。したがって、すでにエリザベスは何度も「人返し」の勅令を発したし、17世紀前半になると、ロンドンの貧民住宅の取り壊しを指示すること、数回に及んでいる<sup>(21)</sup>。

それでもロンドンへの人口集中が収まらないのをみて、ジェームズ1世が「いまにイギリス全体がロンドンになる」と慨嘆した話はよく知られている。このような認識は彼だけではなく、

---

(20) Hull, *op.cit.* Vol. II, pp. 463-464.

(21) ロンドンの人口については、A.L. ベーア・R. フィンレイ編（川北稔訳）『メトロポリス・ロンドンの成立：1500年から1700年まで』三嶺書房、1992年。当局の対応については、W. C. Baer, 'Housing the Poor and Mechanick Class in Seventeenth-century London', *London Journal*, 25-2, 2000, pp.13-39.

17世紀前半の支配層には、ごくひろく見られた考え方であったと思われる。

しかし、このような支配的な見方と、都市民は農民より所得レベルが高く、都市民の多い国のほうが、「進んだ国」だとするペティ以下、政治算術家の発想は、明らかにひとつのハードルを超えてしまっている。

そもそも、ペティの発想では、国の所得は、それぞれの職種の国民の平均所得とその人口の積の総和である。だから、所得の多い商業・金融・サービスの部門に専念して、「農民や歩兵は少ない」オランダ人は豊かなのだが、その一方で自由な帰化を認め、農民や兵士のような仕事は外国人労働者にまかせているのだ、と『政治算術』第一章の終わりのほうで述べている。「他国人を兵士として雇うことは、その国の人口をふやし、特別の経費をかけずに、自国民を危険と窮乏から免れさせる」方法になるというのである。ここからすれば、イギリス人がロンドンに集中することも、望ましいことではあっても、嘆くようなことではありえない。それで、地方がさびれるようなら、外国人労働者を導入すればよいのだ。実際に、17世紀後半、まさに「政治算術」の勃興する時期から、イギリスは農民や労働者として外国人を大量に導入する試み<sup>(22)</sup>を始める。

職業の区分による所得の格差は、キングによってもっと正確に把握され、主張も洗練されていく。キングが作成したよく知られた1688年イギリスの社会構成表は、イギリス人を「本王国の富を減らす家族」と「本王国の富をふやす家族」に二分しており、「一人当たり所得」と「一人当たり支出」の差額の計算がなされてはいるが、計算のベースはむしろ、社会の実態にあわせて「家族」つまり「家計」になっている<sup>(23)</sup>。と同時に、キングでは、なお農村的な職種・地位が多数出現し、都市的・商業的な職業のほうが圧倒的に高所得だという認識はペティほどつよくはない。

個人ではなく、「家族」を基礎単位とする傾向は、結局、「政治算術」の終わりの頃まで、とくに、19世紀初頭のカフーンのそれなどにおいても明確に保持される。

## 6 「政治算術」の立場と近代世界システム

「政治算術」の立場の特徴は、なお聖書から自由にはなれないものの、ある種の科学性・客観性を主張するところにあった。聖書との関係は、むしろ、このような形のほうが面倒な問題を起こさずに、その主張がひろく社会に受け入れられるという計算もあったかもしれない。しかし、「政治算術」のより多くの特質は、近世主権国家の利害と結びついており、それはすなわち、近代世界システムの主流をなす思想につながるものであった。近代世界システムは「西

---

(22) ごく簡単には、川北稔「イギリス人になれなかったドイツ人たち」『西洋における移動と移民の史的構造』(科研報告書[代表合阪学])、平成12年。より詳細には、D. Statt, *Foreigners and Englishmen: The Controversy over Emigration and Population, 1660-1760*, University of Delaware Press, 1995。

(23) King, *op.cit.*, pp.48-49.

ヨーロッパ中心」で「飽くなき成長」を求める資本主義のシステムであった。そこで、「成長」の基準となったのは、『国富論』に集大成される富や生産の概念であったが、それこそ近代世界システムの基本理念でもあった。

政治算術家たちは、国力というものが統計によって測定可能であり、あくまで客観的な数字でもって表示もできると信じていた。しかも、そうして表示される国力は、絶えず上昇していくのでなければならないし、そうであるはずだとも信じていたのである。しかし、「飽くなき成長」が維持できなくなりつつあるように見える今日、われわれの歴史観そのものも、「政治算術」にさかのぼって洗い直す必要があるのかもしれない。成長や進歩についての理解が、われわれにとって深刻な問題となる。

歴史は進歩であるが、労働者の人口にしる、イギリスの人口にしる、どこかで行き止まりになる。これがペティやキングの歴史観であった。「キリスト紀元前」という紀年法を知っていたキングとしては、それが「世界年元年」を越えて、無制限に過去にさかのぼれることも当然理解していたと思われる。しかし、彼の表にある「キリスト紀元前」は、あえて「大洪水」までで止まっている。キングの歴史には、始まりと終わりがあったことになる。

「政治算術」は、18世紀に入って、長く激しい人口論争が闘わされたこともあり、ますます盛んとなった。西インド諸島利害を背景としたマッシーのものや、農学者アーサー・ヤングのものなどがとくによく知られている。19世紀にもなお、同様の試みがなされ、世紀初めには、パトリック・カフーンの詳細なものが現れて、完成度を高める<sup>(24)</sup>。20年代に入ってもなお、ジョーゼフ・ラウが「状態」をタイトルとする書物を著して、伝統を守ろうとした。しかし、19世紀は、同時に、センサスの始まりの世紀でもあったので、「政治算術」の主要な役割は終了した。「政治算術」が播いたさまざまな種子は、経済学、社会学、統計学など近代的な社会科学として、それぞれに成長していくことになる。

---

(24) P. Colquhoun, *The Treatise on the Wealth, Power and Resources of the British Empire*, 1806; Lowe, *op.cit.*; J. Massie, *Calculations of the Taxes for a Family of Each Rank, Degree or Class for One Year*, 1756; A. Young, *Political Arithmetic*, 1774.